小學

日本脩身書

尋常科生徒用

巻四

検定申請本

K120.1
31a
4

K120.1
31a
4

露光量調整、重複撮影

稲垣千頴編述

小學日本脩身書

東京　成美堂發兌

小學日本脩身書巻四

稲垣千頴編述

事親

薩摩國の農夫の二子、兄太郎は十歳、妹亀女七歳の時、母久しく病にふせり、兄は、母に侍するかた

成蹊堂藏版

露光量調整、重複撮影

稲垣千頴編述

小學日本脩身書

東京 成美堂發兌

小學日本脩身書巻四

稲垣千頴編述

事親

薩摩國の農夫の二子、兄太郎は十歳、妹亀女七歳の時、母久しく病にふせり、兄は、母に侍するかた

成美堂藏版

はら、田畠を作り、毎夕家にかへれば、妹と共に、夏は、母の席をあふぎ、冬は、己が身を以て、母の手足をあたため、なでさすりつつ、心をなぐさめなど、大人も及ばぬばかり、心をつけ、孝養をつくすを以て、第一の樂とせり、この事官廳にきこえ、金穀をたまひて、賞せられき、

孝八百行ノモトナリ。

慕親

源頼家、將軍たりしころ、京都に、微妙といふ白拍子あり、七歳の時、その父爲成、ざんげんによりて、陸奥に流されけるを、したひなげき、父

を尋ぬる、つてともならんかさて、白拍子を習ひにて、鎌倉に下れり、頼家めーて、その舞を見、あはれみて、速に、使を陸奥につかはーけるに、爲成すでに、病死せり、微妙之をききて、かなーみにたへず、やがて壽福寺といふ寺にいり、尼となりて、父のごーやうをとむらへり、

人ノ行。孝ヨリ大ナルハナシ。

愛兄

源義家、永保のむかし、清原武衡、家衡とたたかひて、陸奥にありけるが、敵のいきほひつよくーて、義家の軍、ーばーばやぶれたり、そのをり、

義家の弟義光は、右兵衛尉にて、京都にありけるが、之をきき、朝廷にそうもんして、れもむきたすけんことを、請ひけれど、ゆるされざりしかば、つひに官をすてて、陸奥にいたれり、義家喜びて、今わが汝を見るは、父にまみゆるが如しとて、共に力を合せ、進で敵を亡ぼせり、

兄ハ。父ニツギテ。敬フベシ。

愛弟

北條泰時、評定所にありて、弟朝時の家をかこみ、せむる者ありとききて、ただちに、はせゆきて救へり、ある人之をいさめて、公は、今、執權

の職にあり、自重くせられよ、といひければ、春時かたちをあらためぬ、人は、親をしたしむより大なるはなし、みながら弟の死をみて、救はずば、大なる笑をまねくべし、朝時のかこまるるは、他人にありては、小事なるべけれど、我にとりては甚大事なり、といへり、

兄弟ハ手ノゴトク。足ノゴトシ。

女德

水戸の儒者、青山西塢の妻、内田氏は、よくしうとに孝養をなし、又家を治め、子を教ふるに、きそくありて、正しかりし人なり、其のまま子

延于の、學問をたとたるを、西塢怒りて、之を撻てば、内田氏爲に謝し、一つかに、孟母が、機をたちしことなど話して、はげませり、延于之によりて、志をたて、勉強の功をつみ、後學問なりて、父の業をつぐにいたりしは、父の教はあれど、内田氏の、そだてかたの宜しきによれり、賢キ婦人ハ。賢キ男子ヲツクル。

友誼

尾張の人、中西淡淵の門にて、伊藤冠峰、南宮大湫と友たり、淡淵が尾張を去るに及びて、門人半は大湫を師とし、半は冠峰に從へり、冠峰の妻の兄某、冠峰を助けて、大湫をたしー倒さんとしければ、冠峰は、眼病といひて、授業をやめ、門人をば、皆大湫につけ、美濃の笠松にいた

りて、これに居たり、さて大湫は、妻子をのこして、江戸にゆき、一二年の内に、よびむかへんと、約束せーが、火災にかかり、大に困窮して、よぶことと能はざるを、冠峰、美濃にて之をきき、己の田宅をうりて、金をとどのへ、數人をつけて、大湫の妻子を、江戸へたんりつかはせり、

友ノ爲ニ勞スレバ。友ノ情ヲマス。

慈善

東京淺草の、ある老人夫婦、ものまうでしけるに、堀の内あたりにて、日くれ、道にまよひゐたるを、下鷺宮村の大工、新左衛門といふ者の

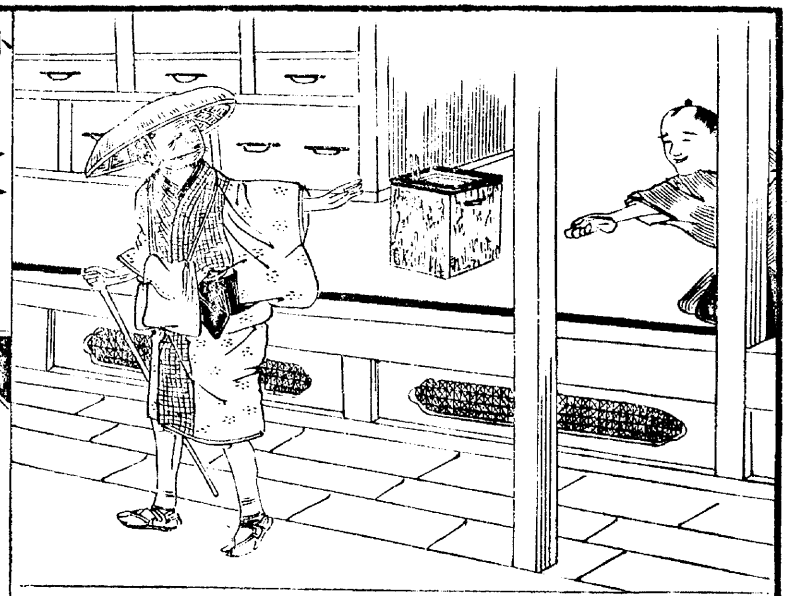
妻之を見て、あはれに思ひ、我が家につれゆきて、夫に其のよーをかたりければ、新左衛門は、やみの夜をもいとはず、一里餘の道を案内ー、ねんごろに行くさきを教へければ、老人夫婦は、喜びて、金そこばくを出ーて、謝ーけれども、新左衛門は、かたくいなみてうけざりき、人ヲメグミテハ念フベカラズ。

武勇

加藤清正、ぶゆうすぐれたる士を、めーかかへんとして、さまゝその にらびかたを、かんがへけれども、べつによき工夫も、たもひつかざ

りけり、ある時、人とものがたりするに、余は、とーごろ、ゆうしーやをこらぶことに、心を用ひたれど、つまるところ、真の勇者は、りちぎものにかぎるなり、といひけるとぞ、りちぎとは、正直にして、義理にかたきをいふ、

正シキ道ニツクス勇氣ハ。勇氣ノモツトモタフトキモノナリ。

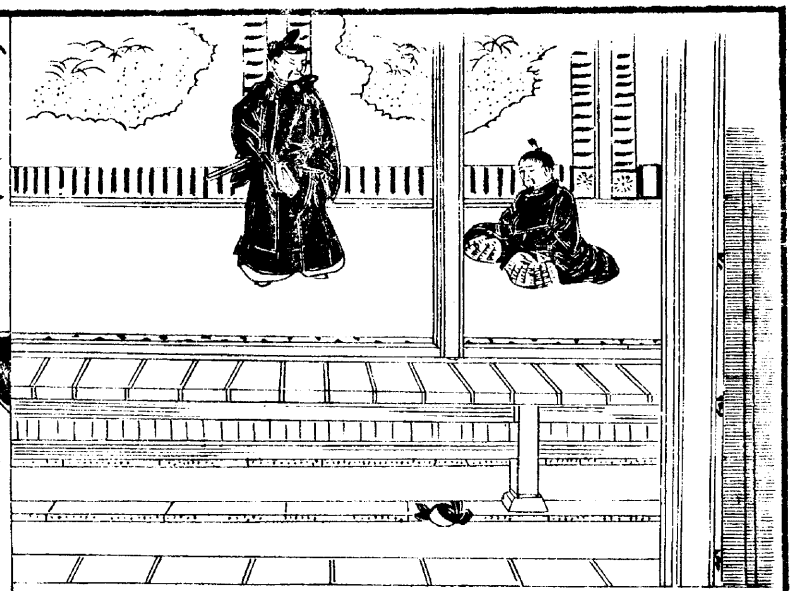


廉恥

京都に、亀婆といふものもらひあり、ある日まちなかにて、金の多くいりたるさいふを、ひろひければ、其のかたはらの家にもちゆきて、

たゞ一人はいかばかりうれふらん、もし たづぬる人あらば、返し あたへてよとて、あづけ たけり、日をへて、たゞ一ぬし 来り、之をにて大に喜び、ひろひくれし人に報いんとて、金一兩を、其の家にたきし を、後 龜婆にわたし けるに、龜婆は、うけずして たち さりけり、

財ニ臨ミテハ苟モウルコトナカレ。



堪忍

行成卿、殿上にて、實方朝臣とあひけるに、實方、何もいふことなく、しやくにて、行成の冠をうちたゞして、小庭になげたり、行成 少しもさ

わがず、人して之をひろはせ、髪のみだれをつくろひ、ゐなほりて、しづかに其の故を問ひければ、實方はぢて、立ちされり、主上物かげより、之をごらんじて、行成は、いうにやさしき者なりとて、多くの人をこゑて、藏人頭といふ、たもき役にしたまひけり、

ナラヌ堪忍スルガ堪忍。

寛大

尾張の人、細井甚三郎といひしは、性寛大にして、人の過をせめず、懇にさとして、其の非を改めしめ人なり、ある時、計算に長ドたる書

生に、家塾の會計をまかせしに、其の書生、私に金を使ひ、歳末に至りて、之をつくのふ策に窮して、歸省をこひしに、甚三郎、之をしれども、其の罪をとはず、却て物を與へけり、數月の後、書生再来り、大に前の非をくいて、行を改め、是より塾の益をなす事、少からざりき、

萬事寛ニ從ヘバ。其ノ福自アツシ。

節制

花さき、鳥なき、そらはかすみわたりて、うららかなる三月のころ、今年七歳なる吾が兒をつれて、畑道をあそびゆく人あり、兒は、たもー

ろきままに、麥のほをぬきて、笛をつくり、又、菜の花をつみとり、などせり、父之を見て、これはみな、農夫の苦みつくりて、われらを養ふものなり、しかるを、いたづらに、取りすつるは、甚あしきことなり、と教へければ、兒は、さとりたりと見にて、すみやかに之をやめたり、

無益ノコトハスベカラズ。

勤儉

松下禪尼、其の子時頼を、家にまねくとて、しやうじのやぶれなる所を、みづからつくろひ居たるに、尼の兄義景来て、人にめいじて、みな

あたらしく、はりかへさせたまふかた、よろしからんといふ、尼(アマ)のいはく、吾も、そのことは知れども、思ふことあり、すべて物は、少しそんじたる時時に、心をつけて、つくろひたけば、たいはにはならぬものなり、今日は、時頼来るべければ、其のだうりをさささん爲なりと、

勤儉(キンケン)ハ家ヲヲサムル本ナリ。

儉素

時頼(トキヨリ)、ある夜、其のしんせきなる、宣時(ノブトキ)をよび、酒(サケ)をすすめていひけるは、此の物あれども、ひとりしてのむは、樂(タノ)しからず、故に君をむかへ

たり、しかれども肴なし、君ゝりやにゆきて、何にても、求めこられよと、宣時あかりをてらして、くりやにいたり、皿に少しばかり、みそのこりたるを、とり来て、これにて事たれりとて、二人ともに、よもすがら、たのしみ飲みて、よろこびをつくせり、

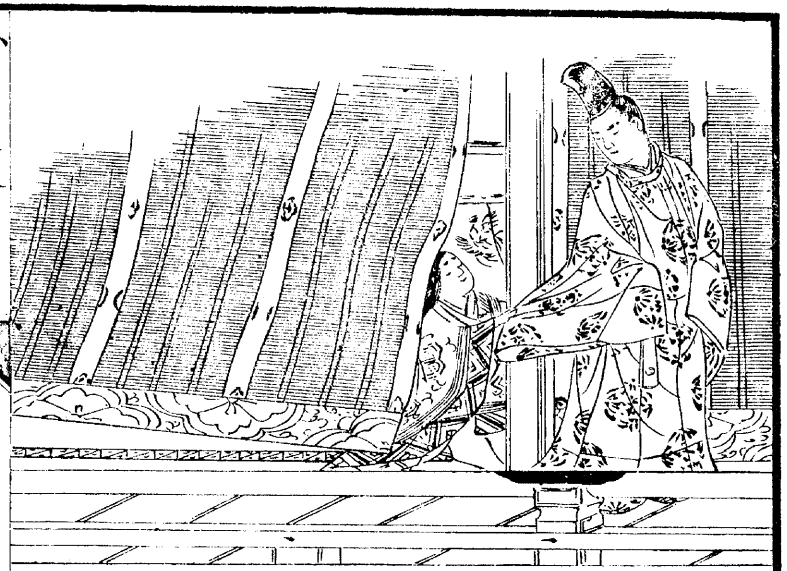
ヨク家ニ儉ニス。

慈仁

仁德天皇、ごそくゐの四年、高きところにのぼりて、人家をのぞみ見たまふに、煙のたつこと少きを以て、民のこんきうせるを知りたま

ひ、ことごとくそぜいをゆるしたまひ、宮の垣(ヘイ)、くづるれども、をさめず、雨風もれども、屋をふかせず、かくて三年ののち、又高きにのぼりて見たまふに、盛に煙たちければ、民とめり、朕(チン)、またうれふる所なしとのたまひ、後また三年をへて、はじめて、宮をつくらせたまへり、

用(ヨウ)ヲ節(セツ)シテ人ヲ愛ス。



藝能

小式部(コシキブ)十四歳の時、ごしよにうたあはせといふことありしに、其の歌(ウタ)よみの中にくはははれり、人みな、小式部の歌は、丹後(タンゴ)にをるその母

の、和泉式部がつくれるならんと思へり、定頼卿といふ人、小式部のつぼねの前にて、丹後につかはされし御使は、かへりたりやといはれしに、小式部、定頼卿の袖をひかへて、歌をよみかけければ、定頼卿たどろきて、へんかもせず、袖をひきはなちて、にげられけり、

幼ニシテ之ヲマナブ。

勉強

攝政道長公、途にて、十二三歳なる童子の、馬をひきながら、かた手に、書物をもちて、よみつつゆくを見て、見どころある童子なりとて、家

につれかへりて、大江匡衡といふ、がくしやにしたがはせて、學問させられけるに、その童子は、はたしてかしこくして、しだいにしやうたつして、はくがくのきこえ高く、後朝廷につかへて、博士となれり、大江時棟ときこえしは、此の童子なり、

身ヲタツルハ。學ブヲサキトス。

公益

周防國、熊毛郡、室積にて、小學校をたてんとて、守田英淳といふ者の家に、人人あつまりて、さうだんすれども、金を出して、之をたすくる

者なきに、苦みけるに、英淳の家の下婢、藤といふ者、常にたいせつにする、銀の釵を出して、しきんのいくぶんに、加へられたしといひければ、人人その志にかんじ、これより、金圓物品など、きふする者多くいでて、たやすく學校をたつることいできけるとぞ、

人ノ害ヲ除キ。人ノ利ヲオコスベシ。

忠貞

醍醐天皇の御世に、菅原道眞公、右大臣となりて、天朝をほさしたてまつり、さいけつ流るるが如くにて、勢やうやく盛なりければ、左大

臣時平公、之をねたみ、ざんげんをかまへて、公を筑前にながせり、然れども、公、少しも朝廷をうらみたてまつらず、かつてたまひし所の、御衣を出して、毎日拜して、したはれけり、かくて配所にて、薨ぜられけるが、後つみなき事、明になりて、位をたくり、神にまつられたり、

臣トシテハ。忠ニトドマル。

愛國

むかし大伴古麿といふ人、唐朝に使せし時、彼の朝廷にて、諸外國の使人を、含元殿にめして、賀正の禮を受けられけり、此の時、我が國の坐位を、西方の第二位として、吐蕃の下に定め、新羅を以て東方の第一位として、大食國の上に定められければ、古麿大に憤り、顔色を正

しくし、ことばを嚴にして、新羅は、古より我が日本に朝貢（テウコウ）せる國なり、然るに今かへつて、大日本國の上にたかるるは、甚道理に背けりと、いたく論ドければ、つひに新羅を西方の第二、吐蕃の下とし、我が國を、東方第一に改められき、

國ノ爲ニツクスハ。父母ノ爲ニツクスガ如クナルベシ。

小學日本脩身書巻四　終

明治二十五年五月五日出版
明治二十五年九月廿八日印刷
明治二十五年九月廿九日訂正再版

著作者　稲垣千頴　東京市下谷區仲徒町二丁目廿一番地
印刷人　三浦源助　岐阜市米屋町廿一番戸
發行兼版權所有　成美堂支店　東京市日本橋區本材木町壹丁目
發賣所　石井鈎三郎　大坂市東區備後町四丁目

定價金六錢五厘